

## 社会調査法による学生のスポーツ行動について ——特に一般男子学生の場合——

吉 野 安 之

### 〈目 的〉

マーケティングの分野では、商品を買うプロセスを行動の次元として、認知→感情→動因→実施に至るといふモデルを考え、これがかなり支持されている。このモデルをスポーツの分野で展開してみようと問題意識したのは1977年であった<sup>1)</sup>。筑波大学体育センター（以下、T大学）のプロジェクト研究による「正課体育に関する調査」<sup>2)</sup>の中では、そのような観点である一つの設問がデザインされている。この調査の目的は高等教育とりわけ大学における保健体育の教育システムモデルを構築するため、その基礎資料を収集することにあつた。今回の分析では、その中で得られたデータの一部を使い、さらに同様の設問形式による調査を金沢大学（以下、K大学）で実施して得たデータを加え、特に各種スポーツに対する反応率を手掛として一般男子学生のスポーツ行動パターンを導出しようと試みた。

### 〈方 法〉

いずれの調査も質問紙による集合調査で、面接法に類似した方法を用いた。すなわち、設問ごとに調査者が文章を読みあげ、若干のコメントをつけた後、被調査者は該当する所を即座に記入していくというやり方である。T大学では悉皆調査であつたが、回収率は84.7%である。K大学では、わたくしの担当授業受講者を対象に調査した。

#### 調査期間

T大学 1977年9月26～30日

K大学 1978年6月～1979年6月

データ処理は京都大学計算センターFACOM M-200を使用し、特にSPSS<sup>3)</sup>を利用して行った。

### 〈結果および考察〉

表1は被調査者の属性の一部を表わしたものである。

これによると、T大学の場合、悉皆調査でもあることから一般男子学生の全体像をほぼ反映しているとみてよいが、K大学の場合、硬式テニス、バスケットボール、サッカーを



選択履習した学生という点では、サンプルに偏りがあるかもしれない。

表2は質問票に選択頻度を調査数で割った比率(%)を、大学別に記入した単純集計である。これを次のようにマーケティングモデルに準拠し、

設問1. ……知覚反応(比率を知覚率) Awareness (Aw)	} 一認知的次元
設問2. ……知識反応(比率を知識率) Knowledge (K)	
設問3. ……興味反応(比率を興味率) Interest (I)	一感情的次元
設問4. ……欲求反応(比率を欲求率) Desire (D)	一動因次元
設問5. ……活動反応(比率を活動率) Action (Ac)	一実施次元

スポーツ種目別に、横軸にそれぞれの次元を順次並べ、縦軸にそれぞれの次元での反応率をプロットしてグラフィックにながめてみたところ、大きく5種のパターンに類型化された。

図1から図10には、53種目のパターンを全部をのせることはできないので、導き出された5種のパターンの代表としてそれぞれ2種目づつを取り上げている。それによると、ここにあげていない種目を含めて、後述のV型のパターンを除くならば、全体的にK大学が反応率レベルで有意な傾向を示しているが、ここではこの傾向差について深く追求することを避け、むしろグラフィック・パターンの形状に注目して分析をした。しかしながら、

図1 バレーボール

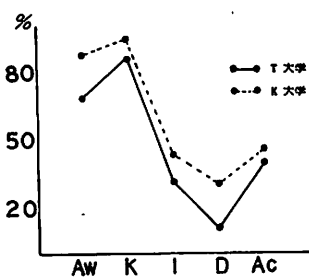


図3 剣道

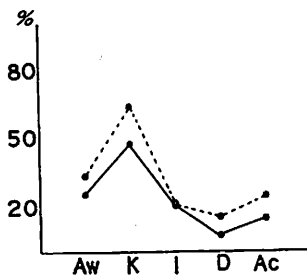


図5 ボクシング

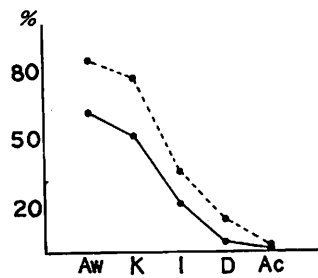


図2 野球

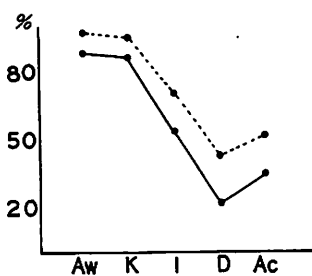


図4 軟式テニス

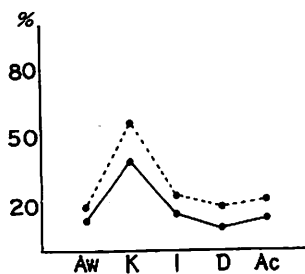


図6 体操競技

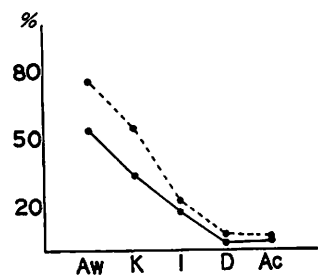


図7 硬式テニス

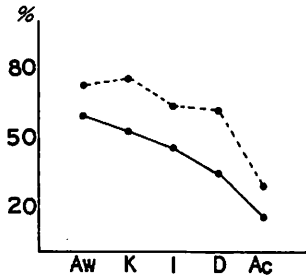


図9 射撃

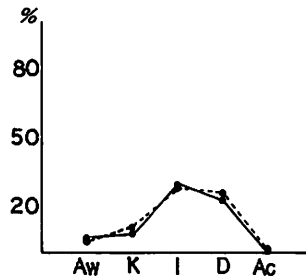


図8 スキー

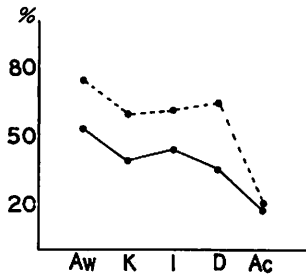
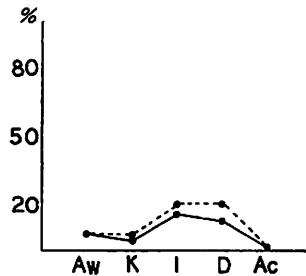


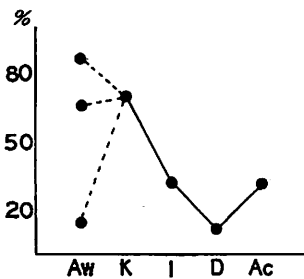
図10 馬術



レベルが高いということは、それだけスポーツ意識が高く、スポーツの実施レベルが優れているというふうにも解釈することもできるが、サンプルの問題や時系列の問題などから一応無視をした。

(1) I型のパターン……図11

図11

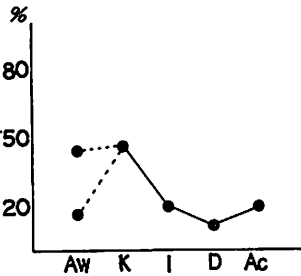


これは、知識率に代表される認知レベルが50%以上と他に比して非常に高く、そこから欲求率に向けてのグラフの傾きが急になり、欲求率が15%前後と低下するが、活動率は約30%と高く、実施レベルの最も高いタイプである。図の中で破線で示す部分は、特に知覚率において非常な格差が見られたことを意味している。

相撲、サッカー、バスケットボール、バレーボール、野球、ソフトボール、卓球などの種目がこれに属する。わが国の学校体育の一つの成果を反映したパターンとみることができよう。また、体育教材として最も一般的に取りあげられているサッカー、バスケットボール、バレーボールといったスポーツと特に教材としては確固たる地位を占めていない相撲、野球、ソフトボール、卓球といったスポーツが同様のパターンを示したことは、興味ある結果である。

(2) II型のパターン……図12

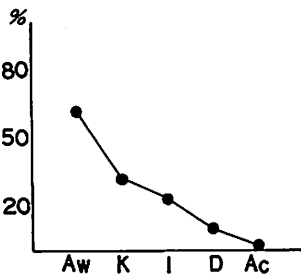
図12



これはI型に類似しているが、認知レベルが約50%とI型より低く、全体としてI型のパターンをレベルダウンしたタイプである。水泳、陸上競技、柔道、剣道、バドミントン、ハンドボール、軟式テニス、ボウリングなどの種目がこれに属する。I型のパターンを成熟期にあるとするならば、II型はその成長期にあると解釈できよう。そして、これらのスポーツは認知的次元でのプロモーションによってI型へ移行する可能性をもっている。

(3) III型のパターン……図13

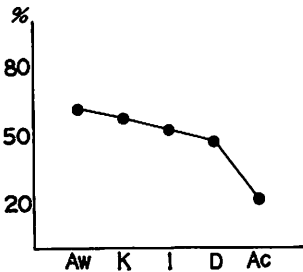
図13



これは知覚率、知識率において50%以上と高率の反応を示しているが、そこから活動率へ向けて右さがりの傾きが急になり、実施レベルの極めて低いタイプである。アメリカンフットボール、ラグビー、ボクシング、体操競技などがこのタイプに属する。マスコミ依存度が高く、認知レベルはI型に近い割に実施レベルが低い特徴があり、認知レベルで何らかのプロモーションをかけても実施レベルはあまり上昇しないことが予測される。

(4) IV型のパターン……図14

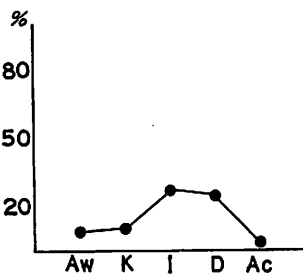
図14



これは4つの次元での反応率が平均的に高く、特に興味率と欲求率は5種のパターンのうち最も高率を示し、右さがりの傾きが緩やかな特徴をもつタイプである。硬式テニス、スキー、アイススケート、ゴルフなどがこのタイプに属する。

(5) V型のパターン……図15

図15



これは全体的に反応率は低いが、4つの次元の中では興味率と欲求率に高い山型のパターンをもつタイプである。合気道、アーチェリー、ウィンドサーフィン、オリエンテーリング、空手道、弓道、拳法、サーフィン、水上スキー、射撃、登山、馬術、ハングライダー、ボート、野外活動、ヨット、ワンダーフォーゲルなどがこのタイプに属する。学校体育教材としてはあまり取りあげられていない種目が多い。

次に設問6による中学、高等学校時代に参加していた運動部経験（1年以上の経験があること）では、表3のような結果を示した。

表3 運動部経験

T 大学	種 目	軟 式 テニス	卓 球	バスケット ボール	剣 道	野 球	陸上競技	バレー ボール	サッカー	柔 道	水泳、 バドミントン
	比率(%)	14	14	13	11	10	10	10	7	7	5
	順 位	1	1	3	4	5	5	5	8	8	10
K 大学	種 目	バスケット ボール	軟 式 テニス	野 球	卓 球	サッカー	陸 上 競 技	バレー ボール	剣 道	硬 式 テニス	柔 道
	比率(%)	17	13	13	12	12	12	11	8	7	5
	順 位	1	2	2	4	4	4	7	8	9	10

- ・経験は1年以上としたので、2種目以上の経験が可能であり、比率の合計は100%を越す。
- ・T大学 N=2424、K大学 N=366

これによると、両大学にわずかの差がみられるが、傾向としては、軟式テニス、卓球、バスケットボール、野球、剣道、陸上競技、バレーボール、サッカー、柔道などの種目が上位グループを占めている。これについて、1975年にT大学が中心になって、全国の国立大学9校、私立大学7校の保健体育受講者6千人を対象に行った「生活と体育・スポーツに対する意識調査」でも、表4<sup>4)</sup>のようにはほぼ同様の傾向を示す結果が得られている。

表4 中学校、高等学校別の運動部経験

中 学 校	種 目	バスケットボール	バレーボール	軟式テニス	卓 球	野 球	剣 道	陸上競技	サッカー	柔 道
	比率(%)	13	12	12	11	10	9	9	6	5
高 等 学 校	種 目	バレーボール	陸上競技	サッカー	バスケットボール	卓 球	剣 道	軟式テニス	野 球	柔 道
	比率(%)	10	9	9	8	8	8	7	7	5

N=4055

従って、これらのスポーツは今日の大学生の過去の運動部経験としては一般的傾向と判断される。また、前述したグラフィックパターンからみると、これらのスポーツはIおよびII型に含まれている。

設問7は学生がそれぞれのスポーツを健康状態と体力から主観的に判断してそのスポーツは運動量が激しいからできないかどうかを調べたものである。一側面からみた学生のスポーツ・イメージを引き出そうとした。

表5 主観的に判断してできないと感じているスポーツ種目

T 大学	種 目	アメリカン フットボール	ウェイトリフ ティング	ボクシング	レスリング	ラグビー	相 撲	柔 道	水 球	空手道	陸上競技、拳 法、体操競技
	比率(%)	45	31	30	29	28	23	19	17	16	14
	順 位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
K 大学	種 目	アメリカン フットボール	ウェイトリフ ティング	ボクシング	ラグビー	レスリング	相 撲	空手道	体操競技	柔 道	陸上競技
	比率(%)	50	46	34	30	27	23	22	21	18	17
	順 位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

・T大学 N=2424、K大学 N=366

表5はその選択率を上位から順にリストして大学別に表わしたものである。サンプルの属性において両大学にかなりの偏りがあるにもかかわらず、ほぼ同様の傾向があらわれている。25%から50%近くの学生ができないとするスポーツは、アメリカンフットボール、ウェイトリフティング、ボクシング、レスリング、ラグビーといった身体が激しくぶつかり合うスポーツによって占められ、特徴的な傾向を示した。以下、相撲、柔道、空手道、水球といったスポーツをあげ、共通して身体接触を伴なう形態のスポーツを運動量が激しいからできないと判断しているようである。

以上、本調査結果をもとに学生のスポーツ行動を概観した。

さて、マーケティングにおける購買プロセスでは広告などによって認知的次元を高めると、それが感情、動因次元に影響を与え、実施次元の購買力が高まると考えられている。I型のパターンに属するスポーツは、いわばよく売れている品物に値する。一方、V型のパターンに属するスポーツは認知的次元でのプロモーションが少なく、例えば講義の中で視聴覚的にそれらのスポーツを取りあげるなど、広告に似たプロモーションをかけ、実技の授業でデモンストレーションを行なうことによっては実施次元の上昇を期待することができるスポーツであろう。また、IV型のパターンに属するスポーツは学生の最も強い興味と欲求を示し、何らかの形でこれに答える姿勢が大学保健体育に課せられていることを示す一つのデータを提供しているものとも言える。振り返って、現状の大学保健体育実技のカリキュラムをながめてみるに、表6<sup>45</sup>のように上位ランクの開講スポーツは、Iおよび

表6 保健体育実技で開講しているスポーツ種目

種目	バスケットボール	バレーボール	卓球	バドミントン	軟式テニス	スキー	サッカー	ソフトボール	トレーニング
比率 (%)	100	95	95	89	74	74	68	58	47
種目	ダンス	硬式テニス	陸上競技	水泳	ゴルフ	野球	柔道	オリエンテーリング	なわとび
比率 (%)	47	42	37	37	32	26	26	26	26

N=19

II型のパターンに含まれるスポーツが非常に多いことに気づく。最近、大学保健体育実技における望ましいカリキュラムのあり方が問題視され始めてきたが、この5種のパターンによるスポーツの類型化は一つの示唆を与えるものと考えられる。

社会調査では、とかく調査の実施や集計に大部分のエネルギーを費やしてしまう傾向があり、特に結果の活用の面がおろそかにされる。結果が活用されてはじめてその調査が意義づけられてくる。その意味で、この類型化によるスポーツ種目を大学保健体育実技カリキュラムの展開にあたって活用し、大学保健体育のあり方の再検討をしていきたい。

#### 〈ま と め〉

一般男子学生のスポーツ行動をマーケティングモデルを適用しての調査から、選択反応

率を手掛として分析した結果、次のことが把握された。

- ① 4つの次元からみた学生のスポーツ選択反応は大きく5種のグラフィックパターンに分類できた。
- ② 中学、高等学校の運動部経験の傾向は過去の調査にみられた傾向とほぼ一致した。
- ③ 各スポーツに対する主観的イメージとして学生が健康状態および体力から判断し、運動量が激しいからできないと感じているスポーツの形態は、激しく身体的接触を伴なう点にあると言うことができよう。

注1 筑波大学助教授 松田義幸氏により問題提起された。

注2 著者も1978年3月まで、その研究スタッフであった。

注3 Statistical Package for the Social Sciences の略称

注4 1976年、著者による日本体育学会口答発表資料

注5 (社)全国大学体育連合による北陸地区、国公立の大学と短期大学19校における保健体育実技種目の調査(1978年)結果